

# 第13話 北清事変と日英同盟

欧州列強の清国圧迫。これを憤って、清国民の間に排外熱が盛んになる。  
 義和団の乱。このごたごたに乗じて露国が満州を占領する。  
 極東において利害を同じくする日英両国の同盟。

## 清国の無力の暴露

日清戦争によって清国の衰弱が暴露されると、これまで久しくその豊かな富源に羨望の涎を垂らしながら、東洋第一の老大帝国の名の前に、敢えて手を出すことを躊躇していたヨーロッパの諸強国は、俄かにその実体の無力で与し易いを知ったところから、いよいよ貪婪飽くなき蚕食の欲を逞しくしはじめた。先づ第一着にその毒牙をかけたのが、ロシアです。

## ロシアの領土的野心

これより先き、ロシアは満州か朝鮮かに良港を得ようと久しく望んでいたのだが、今度、日本に迫って遼東半島を清国に還付させると、やがてそれを恩にかけて、明治29年6月、先づ清国と密約を結び、満州に東清鉄道を敷設する権利および黒竜江省、吉林省、長白山などにおける鉱山の採掘権その他を得た外に、山東省の膠州湾を15カ年間ロシアに貸与させることにした。

## ドイツの膠州湾租借

ところが、明治30年11月、ドイツの宣教師2名が山東省の曹州府下で、暴民に暗殺され、その教会堂が破壊されると、ドイツはそれを口実として突然膠州湾を占領し、更に数隻の軍艦を東洋に急航させて、大いに清国政府を威圧した上に、極めて強硬な談判を試みた。十二分の償金を支払わせたのみならず、例の三国干渉を



中国 山東省 膠州湾

種にして、当然、清国はドイツのつくした友誼に対して感謝の誠意を表すべきであるとの建前から、翌31年3月6日、膠州湾租借条約を成立させ、膠州湾の99カ年の租借権、及びや山東鉄道の敷設権、同線路の左右15kmの区域内に在る鉱山の採掘権などを得た。まことに高価な宣教師2名の命であったと言ってよい。

## ロシアの旅順および大連租借

ところで、膠州湾はすでに述べてもおいたように、ロシアが借り受けることになっていたところなの

## 第13話 北清事変と日英同盟

に、ドイツが突然これを横奪したのですから、本来ならば、当然ロシアから抗議が出すべき筈だが、ロシアは予ねてドイツから内交渉を受けていたので、却ってそこはドイツの為すがままに委せておいて、自分は急に旅順を占領した。そして、膠州湾租借条約が成立した直後、明治31年3月27日、清国に関東州租借条約に調印させて、旅順、大連およびその付近一帯の地を25年間租借し、東清鉄道の支線をこの地まで延長し、且つ沿道の鉱山を採掘することとした。

膠州湾よりも旅順、大連の方が、ロシアが前々から目をつけていた処だからです。しかも、この地が、さきに東洋平和の為と号して、我が国に清国に還付させた遼東半島の一部分であることは、改めて言うまでもないでしょう。何という横暴、何という悪辣、何という傍若無人なロシアの仕打ちだったでしょう。

### イギリスの威海衛租借

このロシアの旅順、大連地方の租借については、イギリスもまた頗る不快を感じて、しばしばロシアに対して異議を挟んだのだが、ロシアが一向にこれを顧みようとしなかった。それでついにイギリスも清国に要求して、明治31年7月1日に威海衛租借条約に調印させて、ロシアが旅順、大連を租借している間に、イギリスは威海衛を租借する事とした。渤海方面においてロシアと勢力の均衡を保つためです。この時は我が国で威海衛を占領していたのですが、イギリスから我れに対して「日本が撤兵後に、ここを租借しても異議はないか、」と言って来たので、我は、「清国の独立維持に援助の意ある国がこれを租借することに反対しない、」と答えて、イギリスの租借に諒解を与えたのでした。

### フランスの広州湾租借

すでにドイツおよびロシアがそれぞれ租借地を得て、イギリスもまた威海衛の租借を交渉している時、どうしてフランスが黙っている筈があろうか？ 明治31年5月、彼れもまた清国に対して、広州湾の租借を要求してその承諾を得た。広州湾は南清の広東省に在る。フランスの利害関係が主として仏領印度支那（訳注：今のベトナム）に近い南清地方にあったからです。租借条約の調印をみたのは翌32年11月16日でしたが、その地域は広州湾辺りで約800km<sup>2</sup>の面積で、その年限は99年でした。すると、これに対してイギリスは黙っていなかった。フランスの広州湾租借は英領香港の軍事上、商業上の利益を侵害するものであるから、この地方において、フランスと勢力の均衡を保つためと言って、イギリスは香港の対岸である九龍半島の全部および香港付近の島々その他の99年租借することとした。

### 福建省不割譲の約束

このように、清国の要所要所が頻りにヨーロッパの諸国に租借されて、いわば清国の分割がここに始まりかけようとしたために、ついに我が国も新領土である台湾の国防上から黙っていられなくなり、清国に交渉して、台湾の対岸の福建省は他国に割譲したり租借させたりしない事を約束させた。明治31年4月の事です。

## 第13話 北清事変と日英同盟

### 清国の門戸開放の宣言

折から、アメリカ合衆国は、この年、ハワイ島を合わせて連邦の一つとし、又、フィリピンをも合併したので、極東に対していよいよ利害関係が深くなっていた。一方、英露の2大国はますます清国を南北から圧迫して、イギリスは揚子江流域を、ロシアは万里の長城以北の地を、おのおのその勢力範囲とする協約を結んだのみならず、最後に満州に関する英露の交渉で、ロシアがイギリスの要求した「満州において特に一国のみを利する鉄道運賃、その他の準率を設けないようにという条件」を拒んだ。

それで、アメリカ合衆国は、それでは将来、清国における自国の通商航海に大きな不利益を被るようになることを恐れ、ここに清国の門戸開放に関する原則3か条を定めた。明治32年9月、先づこれをもってイギリスに謀り、ついで12年下旬に至るまで日本および、露、仏、独、墺、伊の諸国に謀って悉くその同意を得た。所謂清国の門戸開放の宣言がこれで、その趣意とするところは、「列強が清国の一地方に対して特別の関係を作ることには反対しないが、ただそのために、他の諸国が条約上の権利を阻害されたり、または通商条約上の利益を独占されたりするような結果を生じることには反対する」というのでした。

### 義和団の蜂起

さて、このように、謂れもなく列強に圧迫されても、清国政府は全くこれを拒むことが出来なかったもので、その国民の間には次第に外人を忌み嫌う念が盛んとなり、ついに明治32年12月、義和団という宗教団体が山東省に乱を起こした。するとたちまち不逞の徒がこれに加わって「保清滅洋」の旗を翻して外国の宣教師を殺し、キリスト教会堂を壊したりして外人排斥を實行しようとした。

### 清国政府の処置

折から清国政府は、光緒帝の下で所謂変法自強の説を唱えて大いに内政を改革すべく富国強兵の実を挙げようとしていた康有為、梁啓超らの改進黨を、退けた。そして、頑冥固陋で全く時代の推移を知らずにみだりに外夷を撃ち払って積年の恨みを晴らそうとしていた西太后を中心とした保守派が代わって勢力を振るった。

それで彼等は、義和団の勢いがますます熾んとなって翌33年の春に乱が拡大して直隸省に及ぶと、公然これを称して義民と呼び、ひそかにこれを援けて外人を駆逐しようとした。それで、団匪の勢いはますます熾んとなるばかりで、5月中旬には保定府で略奪を行い、キリスト教徒61名を殺し、英国の教会堂を破壊し、その下旬には所々の鉄道を破壊したり、停車場を焼いたりしたために、北京、保定間の交通も、北京、天津間の交通も杜絶した。

### 北京の列国公使会議

これより先き、北京駐在の列国公使は会議を開いて、団匪の取り締まりを清国政府に要求したが、一向にその効果が現れなかったのみか、却って団匪の暴状はますます甚だしくなるばかりなので、5月28日に、更に会議を開いて、自衛のためにおのおのその国の軍艦から兵を招くこととした。そこで、日、

## 第13話 北清事変と日英同盟

英、米、仏、伊、露、独などの各国陸戦隊は5月31日から6月3日にかけて北京に入ったが、その数は僅かに400余名にしか過ぎないのに、直隸省内の団匪はすでに数万を超え、いたるところで教会堂を破壊し、宣教師を殺し、避難しようとする外人を襲撃したりしながら、迅速に北京に近づこうとしていた。のみならず、6月10日には西太后が甘肅提督董福祥を引見して、外人殲滅の密旨を下したという噂が立った。

### 救援隊の立ち往生

それで、列国公使は更に会議を開いて、陸戦隊の増派を要求したので、即日に英国東洋艦隊司令長官シーモアは、連合兵1700名を率いて太沽から北京に向った。ところが、この時にはすでに団匪のために鉄道は破壊され、電線は切断されていたので、その進行は思うように捗らなかった。のみならず、漸く12日に郎房まで達した時には、更に、後方、天津との間の鉄道もまた破壊されて、弾薬および糧食追送の途が絶えてしまった。シーモアはついに18日から余儀なく退却を始め、途中で、清兵および団匪の攻撃を受けて悪戦苦闘しながら、6月26日、辛うじて天津に引き上げた。

### 我が外務書記生の惨殺

一方、この救援軍の来着を待ちこがれていた北京の列国公使館は、途中でそういう故障が起こっていろいろなどとは夢にも知る由が無かったので、11日に、その出迎えのために我が公使館の書記生杉山彬を城外に派遣した。すると、董福祥の部下が無法にも杉山彬を永定門外に殺して、その屍を路上に裂いて棄てた。なんという残虐か。実に憎み憎んでもなお余りある所業です。

### 太沽砲台の発砲

しかも、西太后の頑迷は、その上にもなお外国兵の上陸を阻止するためにと、天津の鎮兵に命じて、太沽砲台の戦備に着手させたので、彼らは17日午前零時50分、突然、停泊中の列国軍艦に向かって砲撃を加えた。ところが、これは忽ち列国艦隊の猛烈な応戦に遭って、ついにその陸戦隊のために砲台は占領された。すると、清国政府は、その18日に列国公使に向って、「列国が太沽砲台を占領したのは、列国から好んで戦端を開いたもので、我が国民の激昂が甚だしく、政府は到底外人を保護することが出来ないで、24時間以内に一同北京を退去してもらいたい」と要求して来た。

### ドイツ公使を射殺

こうして、義和団の乱は、今や転じて清国の対列国戦となって来かけたのですが、それにしても余りに軌道に外れた清国政府の外交であったので、なお一応の反省を促すためにと、翌々20日、ドイツ公使ケットレルが列国公使の代表者となって清国政府に談判に出かけて行った。ところが、その途中で、彼は清国官兵のために射殺されてしまったので、事態はここに全く決裂した。

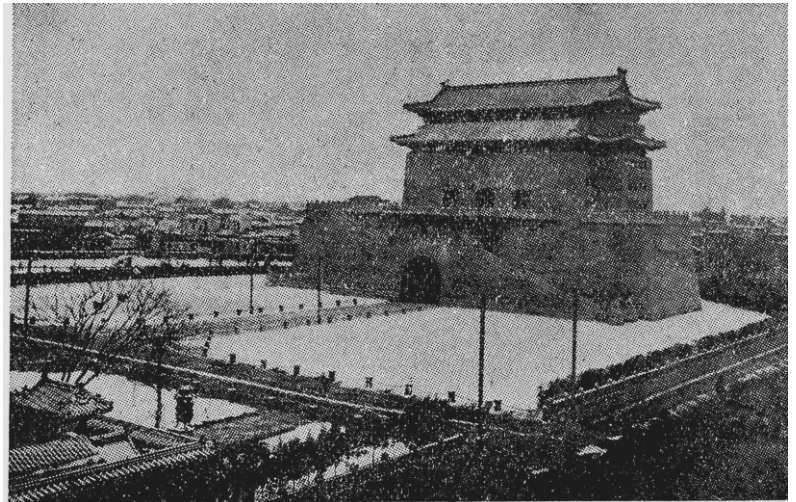
### 清国政府の宣戦

清国政府は、この日、公々然と開戦に着手した。午後4時から外国公使館を砲撃させたが、翌

21日には、ついに列国に対して宣戦を布告し、22日には**莊親王**と**軍機大臣 剛毅**との二人を統率義和団大臣に任じた。乱民、義和団の力によって外人をことごとく国外に駆逐しようとしたのです。とても正気の沙汰とは思われないようなことです。

公使館包囲への救援

それはともあれ、北京における列国公使館は、これより殆ど毎日、猛烈な包囲攻撃を受ける事となったのだが、これを防ぐものと言ってはただ、さきに入京した400余名の陸戦隊と、俄かに編成された居留民その他の義勇軍との外には無かった。それで全く文字通り孤軍奮闘で、ひたすら急援軍の来るのを待つばかりでした。



中国 北京 紫禁城の正門

我が国の出兵

我が国では、初め、北京の危急が報じられた時に、先づ参謀本部第二部長陸軍少将 **福島安正**に、歩兵第11、第12連隊の外に騎兵、砲兵、工兵、輜重兵の各部隊若干を加えた臨時派遣隊を率いて救援に赴かせた。その後、ますます切迫したので、6月23日に駐日各国公使は我が外務省に集まって、この際、大兵を動かすのに最も便利な日本から、更に急速に急援軍派遣のことを協議した。

ところが、利己主義の立場から、各国の議論がまちまちで、或る者は日本の出兵を希望し、或る者は日本だけが兵を出すと、後になってから過大の要求をされる虞があるので、これに制限を加えなければならぬと反対したので、何ら纏まるどころがなかった。

しかし、そういううちにも北京の形勢はますます悪化し、事態は絶望にも近くなって来たので、ついに7月初旬、英国公使の斡旋に諸外国公使も同意し、我が国に大兵の派遣を求めるに至った。

そこで、我が政府は第五師団に出動を命じた。師団長陸軍中将 **山口素臣**は直ちにこれを率いて天津に向った。

天津城の占領

これより先き、6月26日に郎房から辛うじて天津に引き上げてきた連合軍は、爾来、天津城の清兵および団匪と日夜戦闘をつづけていたが、列国の増援軍も次第に到着し、7月11日には我が**福島少将**の率いる臨時派遣隊もまた到着した。



中国 天津 天津市街の鼓楼

すなわちその13日に福島少将の意見に基づき、日、英、仏、米の連合軍は大挙して天津城を攻撃し、翌14日に全くこれを陥れた。因みに言うが、さきの列国の陸戦隊が太沽砲台を占領した時にも、先頭第一は我が日本軍でしたが、この天津城の時の先頭も我が軍でした。

さて、山口中将の率いる第五師団は、7月19日に天津に入ったが、この時には列国もまた多少の兵力を増していたので、それぞれ軍容を整え、8月5日の午前をもって、日、露、英、米、独、伊、澳の8カ国の連合軍は、いよいよここを出発して北京に向った。

#### 連合軍の北京進撃

その日、連合軍は先づ北倉の敵を攻めてこれを破り、翌6日、楊村の敵を撃退して、そこを占領したが、7日には、日本軍から一支隊を出して南蔡村の敵を掃蕩した。こうして翌8日から、日、露、米、英の順序で白河の右岸を前進して、行く行く抵抗する敵を駆逐し、撃退しながら、12日に通州に達した。そして13日に、北京城の近くに達して、偵察を行ったが、この夜、露軍が約束に背いて戦闘を始めたので、にわかに15日の総攻撃の予定を変えて、14日の早朝から北京城の総攻撃に移った。

#### 連合軍の北京入城

さすがに敵の抵抗もここでは中々頑強だったが、例によって我が日本軍の先頭支隊が、先づ東直、朝陽の2門を破って城内に突入すると、敵の勢いは俄かに挫けて、他の列国軍も続いて他の門から入城した。実に6月20日から包囲攻撃されていた列国の公使館は、ここに56日を経て初めて漸く救われたのです。重囲に陥っていた人々の生き返ったような喜びは、どんなであったでしょう。泣いて抱き合ったと聞いても少しも不思議ではありません。

一方、西太后を中心とした保守派の一派は、連合軍の入城を見ると、15日の早朝、光緒帝を奉じて逸早く北京を逃げ出し、先づ山西省の大原府に走り、後に更に遠く陝西省の西安府に移った。

こうして北京は鎮定したが、清国政府の首脳部が皆逃げ去っていたので、一時は講和をしようにも相手が無いというような有様でした。それで、列国公使は先づ清国政府の興復を謀り、ついで講和の条件を定めようと頻りに会議を重ねた。

そうこうするうちに、連合軍の総指揮官としてわざわざ派遣されたドイツの元帥ワルデルセーが9月27日に天津に来着し、10月17日には北京に入ったが、この時、列国の新来兵もますますその数を増して、すでに60,000人にも達していたので、これより次第に討伐隊を各地に派遣して、敗兵および団匪の掃蕩につとめた。直隸省の殆ど全部は間もなく連合軍の支配の下に在るようになった。

#### 講和条約の調印

そのころになって、清国政府はようやく慶親王および両広総督李鴻章を講和全権委員に任じたので、すなわち12月24日に列国公使ははじめて両人と会見して、講和条件12条から成る連名公書を提出した。ところが、翌34年1月上旬に至り、露国が密かに清国と約を結んで、満州を占有しようとしていることが分かったので、日英両国の首唱で、露清両国に先づその廃棄を勧告しなければならなかった

りしたために、講和の進行が遅れて、漸く同年9月7日になって、最後の議定書に列国公使と清国全権との記名調印を見た。

この条約によって、清国は先づ元凶を厳罰し、日独両国にそれぞれ公使殺害と書記生惨殺とに対する謝罪使を派遣し、列国に対して償金四億五千万両（当時の六億三千三百五拾万円、633,500,000円）を支払い、列国がその公使館に護衛兵を置くことを承認して、太沽砲台および北京と海浜との間の諸砲台を破壊することなどを約束して、所謂北清事変はここに全くその局を結んだ。

### 莫大な賠償金

この事変は初めから終わりまで、約1ヵ年を費し、列国軍の戦死者は約750名、負傷者は約2,800名でした。清国のそれははっきりと分からないが、直隸省だけでも10,000を下らなかったと言われるので、全体では可なり莫大な数に上ったろう。又、賠償金が450,000,000両というのを見ても、いかに損害が大きかったかも想像される。日清戦争の時の賠償金は、実にこの半額にも足らない200,000,000両であった事を皆さんは覚えているでしょう。

### 我が軍の真価が認められる

ところで、この前、日清戦争において我が軍が勝利を得た時には、日本が強いのではなく、清国が余りにも弱かったと言った者も少なくなかったが、今度、この事変において、我が軍が常に列国軍の先頭に立って、抜群の功績をあらわすと、その規律の正しく、その態度の勇敢で機敏なのに列国は齊しく驚歎した。従って、大いに我が国威を発揚することが出来たが、それと同時に、我が国民の自尊心もますます強められて行ったのです。

### ロシアの満州占領

ところが、ロシアはこの事変の際に、満州にいた清兵が、暴徒に应じて、在留のロシア人を襲うと、忽ちこれを口実として東清鉄道保護のためにと、4軍団約200,000の大兵を迅速に満州に入れてその要地々々を占領した。そして事変が鎮まった後も、なお撤兵せずに、却ってひそかに清国政府に逼って密約を結び、前にも少し述べたように、満州全部を手に入れようという多年の望みを達しようとしていた。そこで我が国は英米の2国と共に清国政府に警告して、断じてこれを結ばせないようにする一方、露国政府に対して強硬な抗議を提出した。露国政府は直ちに密約の破棄を言明したが、もとよりそれが本心では無かったので、北清事変が全く局を結んだ明治34年10月になると、またぞろ清国に逼って密約締結の交渉をはじめた。

### 日英同盟の成立

この時にあたって、我が国とイギリスとは清韓両国の領土を全うし、東洋の平和を保つことにおいて多年その意見を同じくしていたので、かくもロシアがしつこく清国を圧迫して、ややもすれば極東の形勢を危うくしようとしているのを見ると、ついに互いに起って同盟を結ぶにつとめ、明治35年1月30日に



## 第13話 北清事変と日英同盟

英首都ロンドンにおいて日英同盟条約に調印した。

すべてで6か条から成り立っていた。その要領は、両締約国の清韓両国において有する利益が、別国によって侵略された時に、両締約国の一方がその利益を擁護するために戦端を開いた時は、他の一方は好意の中立を守り、併せてその同盟国に対して他国が交戦に加わる事を妨げるように努める。もし他の一国もしくは数国がその同盟国に対して交戦に加わる時は、他の締約国は来てその同盟国に援助を与え、協同して戦いに従う。講和もまた両国合意の上ですべきことを約し、其の効力を5ヵ年と定めたのです。

### ロシアの満州撤兵宣言

こうして、久しく他国と同盟しないで、いわゆる光輝ある孤立を守っていたイギリスが、我が国と相携えて東洋の平和を維持し、ひいて世界の安寧を増進することになると、ロシアはこれに対して、従来の露仏同盟の範囲を拡張して、極東をも包含して共同防御に当たることを3月12日に宣言した。

しかし、ついで4月8日には清国と満州からの撤兵条約を締結し、向う6ヶ月間に先づ盛京省の西南部、遼河に至る地方から撤兵し、次の6ヶ月間に盛京省の残部および吉林省から撤兵し、更に次の6ヶ月間に黒竜江省から残余の軍隊を撤退することを誓約した。勿論、日英同盟に恐れるところがあつたからです。

しかし、果たして、ロシアにこれを履行する誠意があつたであろうか。

( 第13話 北清事変と日英同盟 終わり。 次は前頁に戻り、第14話 日露戦争 )